

アスペクト盲の問題

井原 奉明

The Problem of Aspect-blind

Tomoaki Ihara

Abstract

What is the concept of others? They are the ones, who give different meanings from ours to the same situation. For the further study of how we can live together with them, can make a harmonious communication with them, and can mutually understand each other with the building up of the solidary foundation, the author tries to raise two questions in this article. They are as follows; What cannot an aspect-blind person do? Is an aspect-blind exceptional? As to the former question, an aspect-blind can only construe one way even though there are some other possible construals in the multi-aspectual situation. And as to the latter question, an aspect-blind is not exceptional, because any kind of act can accord with any construal, following Wittgenstein's discussion of rules.

1. 本研究の目的

グローバル経済の発展、民族紛争の激化、価値観の対立、宗教的狂信に拠る行動の過激化等が顕著に見られる現在、同じ状況に対して異なる意味づけをする〈他者〉—極端に言えば意味づけをまったく共有しない〈絶対的他者〉—といかにして相互交流・理解が可能か、真の共同性(われわれ)を生起させ、共生・共存が実現するような連帯基盤をどうやって築くことができるか、熟議による解決法の提示が求められている。本研究は、同じ状況—〈同じひとつの〉ものやこと—に対する意味づけ(事態把握)をアスペクト把握と捉え、ものやことの複数アスペクトを捉えられないアスペクト盲を〈絶対的他者〉と措定して、アスペクト盲とのコミュニケーション(=コミュニオン)の可能性を通じて〈絶対的他者〉との連帯基盤構築を探る研究である。

本論文では、本研究の初期段階として、アスペクト盲は何ができないか、アスペクト盲は例外的か、という二点について論じてみたい。

2. 研究の背景

同じ状況—〈同じひとつの〉ものやこと—に対する意味づけを〈他者〉と共有しない、つまり見解が相違するが故に対立が深まるという事態は、人間関係に関わる個人間の問題であると同時に社会間の深刻な問題でもある。この事態を〈見解の相違〉と見ているだけでは問題の解決とならず、双方の対立を解消して友好的な未来を築くことはできないだろう。〈見解の相違〉を克服し、共生・共存の連帯基盤を築くためにはどうしたらよいか。本研究では、〈見方〉〈見え方〉の相違をアスペクト把

握の相違と考え、アスペクト研究・他者研究を深めることによって、問題にアプローチするが、その背景を簡単に説明する。

2.1. なぜアスペクトを問題とするのか？

(1) アスペクトの定義

アスペクトとは何か。世界に存在する「もの」(対象)や「こと」(事態)は、ひとつひとつが様々な諸相を持っている。その諸相のひとつひとつは視点と相関的に顕れ、ある特定の意味を帯びた現象として、「△△に見える」という言い方で「見る者」(ある視点から「もの」や「こと」を把握している者)に把握される。このひとつひとつの相のことをアスペクトと呼ぶ。

(2) 写像でなく事態把握

言語は外界の要素を言語形式に射映するという考え方(写像理論)がある。この考え方によれば、状況(事実)は多くの構成要素に分解でき、それぞれが言語の構成要素と対応する。それに対し、たとえば認知言語学では、言語の役割をそのような直接的な射映(mapping)だけに止めない。特定の状況は異なるやり方で事態把握され(construe)、複数のやり方で言語化され得ると考える。事態把握(construal)とは、発話において把握事態を分節し、意味あるものとして構築する創造的な営みのことである。事態把握は、経験世界の実事関係に基づきながらも、原理的には、外界を意味づけする概念主体(conceptualizer)の主観や経験的背景、あるいは個別言語の慣習に大きく依存する。状況理解、つまりものやことへの理解とは、射映把握でなく主観的な事態把握である、というのが筆者の考えである。

(3) 事態把握における状況とアスペクト

事態把握における状況において、言語ゲームの中で、たとえば「○○が見える」という表現が使用される。この場合、当該状況の中で問題となっているのは「○○」の存在であり、「○○が見える」という表現は「○○」という対象や事態と照合することによってその真偽を問うことができる。一方、事態把握においては、言語ゲームの中で「△△に見える」という表現で事態把握され、言表される状況がある。この表現が問題としているのは、「○○」の存在ではなく意味である。いわば、〈存在〉の言表でなく〈見え方〉の言表なので、「△△に見える」という表現は真偽を問うことができない。この後者において事態把握されたのが、状況の中のアスペクトなのである。

アスペクト把握の言語ゲームにおいては、〈存在〉の違いでなく、〈見え方〉の違いが問題とされる。〈同じひとつの〉ものやことに対して複数のアスペクト把握が可能な場合、ひとつひとつのアスペクト把握のどちらが真であるか、どちらが正しいかを定めることはできないのだから、通常、見解の相違と呼ばれている状況の中で、真偽を争って対立を解消させることはできないのである。

(4) アスペクト把握における大前提

アスペクト把握は、「もの」や「こと」それ自身が変身・変化するわけではなく、それを別様に見る経験のことである。アスペクト把握における大前提は、それが同じ状況—〈同じひとつの〉ものやこと—の〈見え方〉の問題である点にある。同じ状況(=「それ」)に対して「それをAと見る」「それをBと見る」(または、「Aに見える」「Bに見える」)というところにアスペクトが現れるのであって、「それ」自体が異なってしまえばアスペクト概念は成立しない。「A」と「B」は異なっているが、別の何か(ものやこと)ではない。「A」と「B」というアスペクトは〈同じひとつの〉「それ」に結び

つけられているのである。これを、「A」と「B」が内的関係にあるといってもいいであろう。この点が、アスペクト把握における大前提である。

ここで注釈をつけておこなうならば、〈同じひとつの〉ものやことという表現によって、アスペクトを離れて存在する、アスペクト中立的なひとつの基体を想定してはならない。複数のアスペクト、複数の〈見方〉〈見え方〉を包み込んでなお「ひとつ」と数えられる、〈見方〉〈見え方〉から独立した〈何ものか〉があって、それが複数の見え方を許すという考え方は、筆者は取らない。この〈同じひとつの〉は、深く考えると厄介な問題であるが、今のところはこれ以上触れずに議論を進める。

(5) なぜアスペクトを問題とするのか？

同じ状況－〈同じひとつの〉ものやこと－に対し、異なる事態把握をし、異なる言表をしたとする。それが〈存在〉に関する言語ゲームであれば、対象や事実と照合の上で、いずれの言表が真か偽か決めることができる。しかし、アスペクト把握に関する言語ゲームであれば、真か偽を決めることはできない。通常、〈見解の対立〉〈見方の違い〉〈見え方の違い〉といわれるケースは、アスペクト把握の違いであることが多く、それ故に、(2)で上述したように、正しさを争うことができない場合が多いのである。どちらが正しいか決定し得ない状況で、意見や見解の対立をどのように解消し、どのような共生基盤を作っていくかを考えるには、アスペクトを問題としてアプローチするのが良いと筆者は考える。

2.2. アスペクトと他者の問題

(1) 複数事態把握と他者

〈同じひとつの〉ものやことに対し、アスペクトがひとつしかない場合もあれば、複数ある場合もある。言語ゲームの参加者がアスペクト把握を共有する場合も、共有しない場合もある。本研究において問題としたいのは、複数のアスペクトが存在し、複数の事態把握が可能な時に、言語ゲームの参加者が事態把握を共有しない場合である。この場合、参加者は相互にとって、〈同じ状況に対して異なる意味づけをする他者〉として現れる。

(2) アスペクト盲

ここでウィトゲンシュタインに倣ってアスペクト盲という考えを導入しよう。アスペクト盲とは何者か。アスペクト盲とは、ウィトゲンシュタインによれば、何かを何かとして見る能力の欠如している人間のことであり¹。ここまで使ってきた本論のことばでいえば、〈同じひとつの〉ものやことに対し、アスペクトが複数ある場合にその内のひとつしか把握できず、「AをBと見る」や「△△に見える」ができずに「○○が見える」と把握してしまう者のことである。アスペクト盲にとって、〈見え方〉の変化はあり得ない。アスペクトは〈見え方〉が変化する時に把握されるものだから、アスペクト盲がひとつの事態把握をしていてもそれをアスペクト把握とはいえない。

言語ゲームにおけるアスペクト盲は、言語ゲームの参加者と事態把握を共有できない可能性がある。事態把握を共有することができれば相互理解の基盤を作ることができるが、アスペクト盲の場合はそうではない。アスペクト盲は事態把握の共有に基づく相互理解ができない〈絶対的他者〉として現れる。たとえば、ウィトゲンシュタインが『哲学探究』185節において提示した例(1000までの数字を使って「+2」を学んだ子供が1000を超えると1004, 1008, 1012等と続けていく例)における子供は、アスペクト盲であり〈絶対的他者〉である。

(3) 対象－他者でなく主観－他者が問題

ここで対象－他者と主観－他者という区別を立て、整理しておきたい。〈他者〉〈絶対的他者〉は自ら意味づけを行う主観－他者である。本研究における他者の問題は、他者をどのように認知・認識するかという対象－他者に関する問題ではなく、自ら意味づけを行う主観－他者とどう関わるかという問題なのである。

(4) アスペクト概念の拡大

本研究においてはアスペクト概念を拡大する。アスペクト概念はこれまで知覚について取り上げられることが多かったが、ものやこと全般に広げる。そしてアスペクトの前提である〈同じひとつの〉は、共時的同一性だけでなく通時的同一性にも拡大される。

たとえば石という「もの」であれば、石という物体と見るだけでなく、用途によって武器にも飾りにも、ゲームの駒の代わりに、ボールにも使うことができる。それらは石の複数アスペクトであると考えられる。別の例を挙げよう。コップに水が半分入っているという「こと」の場合は、水に注目して「半分ある」と見るか、空の部分に注目して「半分しかない」と見るか、複数のアスペクトがあり、複数の事態把握ができる。他にも例をいくつか挙げてみる。ある交差点を境に道幅が変わっている「こと」に対し、「交差点のところで道が広がっている」と見るか、「交差点のところで道が狭くなっている」と見るかはアスペクトの違いである。「四角い車の左に丸い車がある」と見るか、「丸い車の右に四角い車がある」と見るかもアスペクトの違いであり、「線の上に星がある」か「星の下に線がある」かもアスペクトの違いである。

本研究では、いわゆるものやことだけでなく、さらにアスペクト概念を拡大する。たとえば、数列にもアスペクトがある。数列 1, 2, 3, 5 は、素数列だとみなせば次の数字が 7 となるし、フィボナッチ数列（先行する直前の二項の和の数列）だとみなせば次の数字は 8 となる。数列 1, 2, 3, 5 は複数のアスペクトを持ち、複数の事態把握が可能であるといえるだろう。

認知言語学においてスキヤニングという考え方がある。このスキヤニングという考え方は、あるひとつの状況に複数アスペクトが存在し、複数の事態把握が可能であるという前提に基づいている。スキヤニングにはふたつのモード、連続スキヤニングと要約スキヤニングがある。例えばボールが転がるというような、複数のコンフィギュレーション（要素状態）から成る状況（できごと）がある時、コンフィギュレーションをひとつひとつ認識していく、モーションピクチャーのようなやり方を連続スキヤニングといい、複数のコンフィギュレーションをひとつのゲシュタルトとして認識する、写真のようなやり方を要約スキヤニングという。「ボールが落ちる」と動詞的に捉えた事態把握は連続スキヤニングであり、「ボールの落下」と名詞的に捉えた事態把握は要約スキヤニングである。連続スキヤニングも要約スキヤニングも同じ状況に対する異なる〈見方〉なのである。

言語表現それ自体も、複数のアスペクトを持つ場合がある。ここは議論の余地があるところだと思うが、筆者は、メタファー、メトニミー、イディオムに関しては、それぞれ文字通りの意味と比喩的な意味とがあるという点から、言語表現自体が複数のアスペクトを持つと考えたい。文字通りの意味は、連続とその和に基づく連続スキヤニングの結果であり、比喩的な意味は、全体を包括的に把握した要約スキヤニングの結果であるといえるだろう。

(5) コミュニケーションからコミュニオンへ

〈絶対的他者〉であるアスペクト盲が参加する言語ゲームをコミュニオンと呼ぶことにしたい。言

語ゲームの参加者間で意味が透明な独我論的モノローグの正反対の極にあるのがコミュニオンである。コミュニオンとは、本来の意味でいうディアローグ（ダイアログ）であるし、交通（インターコース）である。これらの用語を使っても構わないのだが、言語交流の結果、相互理解や連帯を目指すという意味から、コミュンという語義を活かした用語を使いたいと考える。コミュニオンの研究によって、互いを絶対化せず、相対化させながら新しい価値を生み出すにはどうしたらよいか、共同性・連帯を築くためにはどうしたらよいか、を考えてみたいということである。

3. 本論における主張

3.1. アスペクト盲は何ができないか？

先に見たように、アスペクト把握における大前提は、それが同じ状況—<同じひとつの>ものやこと—に結びつけられる、異なる<見え方>の問題である点にある。同じ状況（＝「それ」）に対して「それをAと見る」「それをBと見る」というところにアスペクトが現れるのであって、「それ」自体が異なってしまうとアスペクト概念は成立しない、という点は先に述べた。

アスペクト盲は何ができないか？ ウィトゲンシュタインは以下の①②のように考えている。

① 対象間の内的関係を把握できない²

② see A（「Aが見える」）はできるが、see A as B（「AをBと見る」）ができない³

①と②とを合わせて考えてみよう。内的関係とは概念間の関係であり、その非存立が思考不可能であるような関係である。対象間の内的関係とは、②でいえばAとBとの関係のことであり、Aという対象をBという意味規則の下に置く、という意味である。「AをBと見る」という表現はまさしくアスペクトの表現に他ならない。アスペクト盲は、AをBという意味規則の下に置くことができず、それ故、「Aを見る」「Aが見える」ことしかできないのだと考えられる。

さて、「AをBと見る」時にAとBとの間に内的関係があり、「AをCと見る」時にAとCとの間に内的関係があるのだとすれば、ここは議論の余地があるが、BとCとの間にも内的関係を見て取ることができるはずである。BとCはアスペクトの表現であり、つまりアスペクトとアスペクトとの間にも内的関係があるといえるだろう（この点、先に述べた通りである）。内的関係があるからこそ、複数のアスペクトが<同じひとつの>ものやことの顕れとみなされるのである。②については、アメリカの心理学者ジャストロウのアヒル・ウサギを例にとると、アスペクト盲は、例の図を見て「アヒルを見る」「ウサギを見る」ことはできるが、「それとアヒル」「それとウサギ」「アヒルとウサギ」の間にそれぞれ内的関係を把握することができないため、「それをアヒルと見る」「それをウサギと見る」ことができないということである。

see A as Bが使える時には、他の見方（事態把握）を理解していることが前提とされるが、アスペクト盲は視点を変更して他の見方をすることができない。複数の事態把握ができた時、その見方を内的に関係づけることができなければ、<同じひとつの>ものやことを見ていると考えることができない。つまり、アスペクト盲は、ひとつひとつのアスペクトを、別々に独立した、相互に無関係の「もの」や「こと」を見る如くに認識することはできても、それらに関係づけて、<同じひとつの>ものやことの複数アスペクトだと捉えることができず、自らの<見え方>を変更することができない。ウィトゲンシュタインの考えをこのようにまとめることができるだろう。

ウィトゲンシュタインの考え方に加えて筆者は、アスペクト盲は次の二点もできないと主張したい。

- ③ 文字通りの意味は理解できるが、比喩的な意味を理解できない (cf. メタファー, メトニミー)
- ④ 部分 (とその和) は理解できるが、包括的な全体は理解できない (cf. イディオム, スキャニング)

メタファー, メトニミー, イディオム, スキャニングは、異なるふたつの概念を関係づける認知操作である。しかしそれには、参照点 (reference point) を基にターゲット (target) へとアクセスするという順次性がある。メタファー, メトニミー, イディオム, スキャニングにおいて、文字通りの意味が参照点となり、そこから比喩的な意味へとアクセスするのである。たとえば「あの車、どこに向かってるんだ」というメトニミーにおいては、「車」が参照点であり、「運転手」がターゲットである。「彼女は氷の女だ」というメタファーにおいては、「氷」が参照点であり、「冷たさ」がターゲットである。アスペクト盲は、順次性のある関係においては、関係づげができないが故に、参照点しか理解することができない。これは言い換えれば、「A を B として見る」ができずに「A (という参照点) を見る」しかできないのだ、ということである。

内的関係に順次性があるような言語表現に関して、アスペクト盲はターゲットの意味 (比喩の意味) を理解することができない。「あの人は冷たい人だ」と聞けば、「体温の低い人」としか理解できず、「漱石を読んだ」と聞けば、「どうやって人間を読むのだ？」と頭を抱えてしまう。このようなアスペクト盲は言語ゲームの遂行に困難をきたすだろう。この理由は、繰り返せば、アスペクト盲は概念間の内的関係が把握できず、それらの意味を<同じひとつの>もの (人) やこと、表現に結びつけられないからである。故に、参照点は理解できても、ターゲットにアクセスできないのだ。

順次性がない場合であっても、アスペクト盲は困難を抱え込む。自分のものとは異なる事態把握が、自分の事態把握と<同じひとつの>ものやことに対してなされたものであることがわからないのだ。ジャストロウのアヒル・ウサギの図を見て「アヒル」と捉えるアスペクト盲は、「ウサギ」と見る人が自分と同じ図を見て語っていると理解できないから、「ウサギだって？ 君は何の話をしているのだ？」と反応するだろう。

ここで想起されるのは、統合失調症患者 (かつて分裂症と呼ばれていた患者) が、ダブルミーニングを持つような表現 (ことわざやイディオム, 本音と建前) が理解できず、いわゆるオモテの意味 (文字通りの意味) しか把握できないという事実である。また、発達障害患者も人の気持ちの推測 (冗談や建前などのウラの意味把握) が困難であるといわれている。これらの現象は、患者がアスペクト盲である可能性を示している。

言語表現の意味だけに限らず、「次々と違う<今>が来る。<今>がバラバラになってしまっつながら進んでいけない」等の症状を訴える統合失調症患者であっても、<今>とその次の<今>との内的関係が把握できず、それらを時間の通時的同一性に結びつけられないのだ。

<同じひとつの>ものやこと、とここまで繰り返し述べてきたが、この「同じひとつ」という同一性は、共時的・通時的いずれにも当てはまる。複数のアスペクトは共時的同一性にも、通時的同一性にも、内的関係を持って結びつけられているのである。

精神疾患に悩む患者の意味理解の問題をアスペクト盲の観点から考察することができるのではないかと、筆者は考えるが、これは今後の課題である。

いずれにしても、アスペクト盲は、複数アスペクトがあり複数事態把握が可能な場合の言語ゲーム

に参加する時、他のアスペクト把握や事態把握の理解ができない。言語ゲームの円滑な遂行は難しいだろうと思われる。

3.2. アスペクト盲は例外的存在か？

ウィトゲンシュタインによって有名となった「1004, 1008, 1012, …と数列を続ける生徒」(『哲学探究』185節)の例を取り上げて考えてみよう。この生徒は、1000までの数字を使った訓練を経て、「+2」をマスターしたとされるが、1000を超える数になると、1004, 1008, 1012と続ける。この生徒は、0, 2, 4, …, 1000の数列に対して、私たちと異なるアスペクトを見、異なる事態把握をしたに違いない(もちろん理解の問題や規則の問題もここには含まれている)。先に、1, 2, 3, 5という数列の例を挙げたが、この数列がふたつのアスペクトを持つように、0, 2, 4, …, 1000という数列も、少なくともふたつのアスペクトを持つのだと考えねばならないだろう。

しかしながら、この生徒は、私たちが1000以上の数に対して1002, 1004, 1006と続ける実践が理解できない。つまり、自分と異なる事態把握を理解できないのである。この生徒は、0, 2, 4, …, 1000という<同じひとつの>数列に複数のアスペクトがあって複数の事態把握があることが理解できないアスペクト盲に他ならない。

この例だけだとアスペクト盲は例外的な存在だと思われるかもしれない。しかしながら、私たちだって、この生徒が出てくるまで、0, 2, 4, …, 1000という数列に複数のアスペクトがあるなどとは考えてみもしなかったのではないだろうか。0, 2, 4, …, 1000にひとつのアスペクトしか見ず、1000以上の数字に対しては1002, 1004, 1006と続けるアスペクトしか見なかったという点において、この生徒をアスペクト盲と呼ぶ限り、私たちもまたアスペクト盲と呼ばれざるを得ない。

同じ状況に対して、可能なすべての事態把握をひとりの人が捉えることができる場合は多くない。制限された一部の<見方><見え方>しかできない方が普通である。言語ゲームの遂行において、私たちは常日頃「問題なく」進めているように思えるが、確率的には事態把握を共有しているケースは必ずしも100%ではないだろう。複数の事態把握があることを知っている上で私と異なる<見方>をする者を<他者>、複数の事態把握があること自体がわからない者を<絶対的的他者>と分けて考えれば、言語ゲームは、私と<他者>とのコミュニケーションが通常の手続きなのだと思う。事態把握を共有していなくても、相手の事態把握を理解しようとし、相互のズレを埋め合わせ、相互理解に努め、時には理解し、時には理解していないままに、言語ゲームを進めているのではないだろうか。

では、<絶対的的他者>であるアスペクト盲はどうであろうか。ウィトゲンシュタインが『哲学探究』の中で考察しているように、「いかなる行動も規則と一致させ得る」⁴のであれば、先ほどの数列の例の生徒も、規則と一致した行動を取っていると主張することができるだろう。そして、アスペクト盲であるということは、複数のアスペクトがあることがわからずアスペクトの変化を経験できないということであり、「△△に見える」や「AをBとして見る」ができなくて、「○○が見える」「Aを見る」しかできないのであった。アスペクト盲は言語ゲームにおけるアスペクト把握を問題とできず、複数の事態把握が可能な言語ゲームにおいても、事態把握における<存在>を問題とすることになる。ということは「正しさ」を問題とし得ると考えてしまうのである。複数のアスペクトがあるのに、である。

私たちが日頃出合っている「もの」や「こと」がひとつしかアスペクトを持たないか、複数のアス

ペクトを持つかは明確ではない。複数のアスペクトが存在することに気づくのは、〈見方〉〈見え方〉の変化を経験した時であるから、自分ではアスペクトの変化に気づかない、つまりひとつしかアスペクトがないと考えているケースが多いかもしれない(0, 2, 4, … 1000の数列の例のように)。しかし、ここに〈他者〉を導入してみよう。そこにいる人たちが、同じ状況に対して、〈同じひとつの〉事態把握しかないことは普通であろうか。筆者にはそうは思えない。通常の場合においては、私や多くの〈他者〉は異なる事態把握をするだろう。多くの場合においては、複数のアスペクトが存在し、複数の事態把握が可能ないように思えるのである。

にもかかわらず、〈他者〉が登場しない時には、自分の〈見え方〉のみしか把握できず、他の〈見方〉があることに気づかないことが多いのではないだろうか。その時、私たちはアスペクト盲と呼ばれ得るだろう。〈他者〉が登場しないところでは、自分の〈見方〉や〈見え方〉を絶対視し、「正しさ」を主張してしまうのではないだろうか。

アスペクト盲は例外的な存在ではない、と筆者は思う。私も、私たちの誰もがアスペクト盲であり得る。そして、複数のアスペクトがあるにもかかわらず、「正しさ」によって意見の対立に決着をつけようとしてしまう。これは間違っているだろう。複数アスペクトが通常の場合ならば、私たちがたとえアスペクト盲であるかもしれないにしても、「正しさ」を争うことはできないことを認識すべきである。多数による一致によってあるひとつの〈見方〉を「誤り」とみなすのもまた間違っているだろう。

言語ゲームにおいてアスペクト盲の存在は例外的でないが、異なるアスペクト把握の中でどれかひとつを「これが正しい」と定めることはできないのである。私たちがいかなる事態把握をしようとも、自らが複数の事態把握の可能性を探り、まなざしを拡げ、対話者との相互理解を進めるようにすること。アスペクト盲の世界は、〈見方〉〈見え方〉の変化がない独我論的な世界であり、そこから抜け出さない限り対話はモノログにしかならないことを理解すること。アスペクト盲である相手に対しては、他の〈見方〉〈見え方〉の存在に気づかせ、そのまなざしを拡げ、アスペクト盲でないようにするという態度が、コミュニオンにおいて求められると筆者は考える。

4. 結 論

改めて結論を要約してみよう。本論ではふたつの問題を取り上げた。アスペクト盲は何ができないかという問題に対しては、複数アスペクトがあり複数事態把握が可能な場合の言語ゲームに参加する時、他のアスペクト把握や事態把握の理解ができず、言語ゲームの円滑な遂行は難しいだろうと論じた。もうひとつの、アスペクト盲は例外的かという問題に対しては、複数アスペクトがあり複数事態把握が可能な場合にあっても、他の可能な事態把握を理解できないケースはままあり、決してアスペクト盲は例外的でないこと。そして、その場合、「正しさ」を争うことができないこと、を主張した。

5. 今後の展望

本研究は今後、以下の点の研究を通じて、冒頭で述べた本研究の主目的の問題解決に迫っていきたい。一点目は、アスペクト論である。ウィットゲンシュタインは晩年、アスペクトに関する論考を残している。彼のアスペクト論解釈およびその批判的検討を行い、アスペクト盲との言語ゲームには何が必要か、どのような方法が可能なのか、ウィットゲンシュタインや研究者たちがどう考えたかを明らか

にしてみたい。

二点目は、他者論の研究である。他者論についてはヘーゲル以降、現象学、実存主義、ポスト構造主義等の研究がある。主観－他者に関する従来の研究を渉猟し、他者との人間関係はいかなるものか、他者との人間関係との対立をいかにして解消することができる（と研究者たちが考えた）かを明らかにしていきたい。

三点目は、本来性（authenticité）やジェネロジテ（générosité）といった概念の探究である。サルトルの『存在と無』における対人関係（＝相剋）では、主観－他者と主観－私との関係はあり得ないが、『存在と無』以降の論考において彼は、主観－他者と主観－私との関係を展望し、相剋を超える共同性に関する考察を残している。本来性（authenticité）とジェネロジテ（générosité）という新たな概念を基本としてサルトルはどのような対人関係を考えたか、どのようにして相剋を超え出ようとしたかを明らかにしてみたい。

四点目は、同一性についてである。構造主義以降、同一性についての考察は実体論から関係論へと移った。＜同じひとつの＞という措定における問題点について、共時的・通時的同一性について諸々の説を調べ、共時的・通時的同一性とはそれぞれ何かを明らかにしてみたい。

注

- 1 Philosophy of Psychology—A Fragment xi 257-8節 参照。以下、翻訳は筆者。なお、Philosophy of Psychology は、以前、「哲学探究第二部」と呼ばれていたが、*Philosophical Investigations*, 4th edition から Philosophy of Psychology—A Fragment と名づけられている。
- 2 Philosophy of Psychology—A Fragment xi 247節 参照。
- 3 Philosophy of Psychology—A Fragment xi 257節 参照。
- 4 *Philosophical Investigations*, 4th edition 202節。

参考文献

Ludwig Wittgenstein *Philosophical Investigations*, 4th edition Wiley-Blackwell 2009

(いはら ともあき 英語コミュニケーション学科)